

四旬節の今、修道院のお庭は春を前に、緑と茶色のツートンカラーです。私は地面が乾くとお水をまきます。水をまきながら少しずつ成長している草花を見ていると私の心が静かに満たされていくのを感じます。

イエスは疲れて井戸の傍に座り、サマリアの女性に「水」を願いました。

イエスとの出会いは、サマリアの女性を「自分を深く知り、受け入れ、福音を告げ知らせるもの」へと変容させました。そして彼女の話聞いて、多くのサマリア人がイエスと出会い「あなたが話してくれたからではなく自分で聴いて真の救い主だと分かった」と信仰告白したのでした。

イエスとの対話のうちに彼女は自分がだんだんと透明になっていくのを感じました。イエスの存在と言葉に吸い込まれていったのでしょう。イエスに心奪われながら、ありのままの自分を語り、受け入れていきます。イエスが彼女のありのままを愛してくださったことによって、自分が内的に自由になっていることに彼女自身が気づいたからでしょうか。辛い過去をもった彼女は人目を避けるように日中に井戸へ行っていました。しかしその辛い過去はイエスに出会い・迎えられるきっかけに変容されたのでした。そして彼女は自分を解放してくださった方を告げ知らせるために人々の中へ飛び込んでいったのです。

聖マリア・ミカエラは 1847 年の聖霊降臨の日に受けた体験を書き残しています。「この時から、わたしの性格は変化し、万事について、自分に打ち克つ力、何の工夫も努力もなしに神のみ前に生きる恵み、祈りに対する熱望などを豊かに受け...それに続く九年間は、霊的乾燥や生ぬるさを感じることもありませんでした。これはみなペンテコステの日に頂いた恵みで、わたしは自分の中に何がおきたのか、何を感じたかも良く分からず、それでいて、あの日に受けた印象は決して消えることなく、わたしの生涯中の特別な恵みの一つです。」(A 3,27)

この体験によって聖マリア・ミカエラは全生涯に渡って神の意志を行うために、神の手の中で鑄造され、当時最も傷ついていた女性たちの救いのために全存在を捧げつくします。あのサマリアの女性のように、女性の尊厳を取り戻し、神だけができる解放の体験を自分の生活を通して告知らせる事が聖マリア・ミカエラの使徒的ミッションとなりました。

2023年の日本でも女性たちが礼拝会の共同体に苦しみを打ち明けるために来られます。「もう何年も家族と離れて暮らしているのに、家庭内で受けた暴力、暴言が未だに自分を支配していて辛い。」「親が厳しかったから、自分を他者に与えすぎています。自分をいたわることができない。苦しい。」年齢や状況は様々ですが、仰っていることを私なりにまとめるとそんな感じになります。

「あなたは成人していますよね。」「自分の人生を自分の足で歩いていますよね」「あなたの仰っていることは私には正しいと感じられますが」と私が反応すると「自分を支配していた人たちはもう自分の近くにはいない。自分で自分の人生を選択することができるんだ。」という気づきを一瞬、感じられるようです。自分が気付いていなかった意識という光に私の些細なことばによって気づく瞬間が訪れたのかもしれませんが。そして私たちは「あなたにあえて嬉しい」という気持ちを、整えられた部屋、お庭で育てたお花、真心こめて作ったお料理やお菓子という栄養でもてなすのです。彼女たちの心の叫びとはまるで暗い土から芽を出し、葉を出している冬の種のようなのです。いつかきっと可愛い花を咲かせるはずです。「私の中にはひどい悲しみがいっぱい、生きていて涙が出ます。今日は優しい心遣いと、綺麗なおもてなしをありがとうございました。シスターたちの生活を見ていて、人間が生きるというのはこういうことなんだという気づきが与えられました。」出会った後で一人の女性がLINEにこうしたためてこられました。

命である庭の草花も私たちから水をもらいながら、私たちへ命を分かち合い私たちの命を解放してくれます。私たちも礼拝の中でいのちの水を頂いて、それを分かち合いながら又彼女たちの命と言葉に

照らされて生きているのだと感じています。